

北海道師範塾 「教師の道」 塾頭通信

第724号 平成26年4月21日

学力向上と塾（2）

雨竜町では、町内の小学5年生から中学3年生を対象に民間の学習塾と連携した学力向上講習「ジュニアスクール」が始まりましたが、これは、今年の3月に公表された中央教育審議会（今後の放課後等の教育支援の在り方に関するワーキンググループ）の中間とりまとめが背中を押したのかも知れません。

いずれにせよ、同町が子ども達の学力の現状を深刻に捉え、積極的に学力向上に取り組もうとする姿勢は高く評価出来ますし、ボランティア等の教育資源が必ずしも十分ではない中で、学習塾との連携は選択肢の一つだと思います。

ただ、「子ども達の学力向上のため」とはいえ、学習塾を活用するに当たっては押さえておかなければならない課題もあるだろうと思っています。

まず、何よりも忘れてならない事は、「子ども達に基礎学力を身に付けさせるのは学校の責任」という事であり、各学校が問われているのは、その責任を果たすために「全ての力を結集して取り組む」という確たる意思と実践です。

仮にもせよ、学校が自ら「塾の手を借りなければ子ども達に基礎学力を身に付けさせられない」と本気で考えているなら、その学校は自分達の存在理由を自ら否定する様なものであり、それも仕方ないと考えるなら、それは学校教育の敗北としかいいようがありません。

雨竜町の子ども達は「自宅学習の習慣が身に付いていない」といいますが、そう評価する前に、学校はその事に対してどの様に取り組んで来たのか検証すべきです。

保護者はじめ地域の人々を巻き込むような取り組みは、行われて来たのでしょうか。

教師一人一人の実践力はどうだったのでしょうか。子ども達が学びに興味を募らせるような実践をして来たか、自信を持っていえるのでしょうか。

子ども達に基礎学力を身に付けさせるための補習という事であれば、土曜日の補習だけでなく、夏休みや冬休みの長期休業期間、更には日々の放課後の時間等を活用する事も可能なはずで、そうした学校としての学習のサポート体制はどうなっているのでしょうか。

子ども達の基礎学力を身に付けさせるために、学校全体としてどう取り組み、その成果と課題は何処にあるのか、そうした検証を十分に行った上で、次なる対策を

講じて行く事が重要です。幾ら地元で学習塾があるからといって、学校教育として行うべき事があるにもかかわらず、その事を脇に置いたままでは、根本的な問題解決には繋がらないでしょう。

勿論、学校のみで全てを解決する事は難しいと思います。だからこそ、学校と地域がどう関わり連携するのか、コンセプトを明確にする必要があると思います。

例えば、子ども達を学校と地域が連携して守り育てるという考え方から、各市町村には学校支援地域本部が立ち上がっており、その活動を通じて、放課後等において子ども達に対する様々な学習支援が行われています。雨竜町においても、そうした地域の力の積極的な活用をまずは考えるべきだろうと思います。

学力調査の成績は、短兵急に良くなるはずはありません。むしろ、学校や家庭における普段の学習の成果がモノをいいます。

一人一人の子ども達に基礎基本の学力をしっかりと身に付けさせるためには、全教師が結束し、目的を共有しながら、学校教育の全体を通して、焦らず、しかし着実に取り組んで行かなければなりません。

子ども達の学力向上に向け、町として「やれる事は何でもやる」というのは誠に力強い限りです。その熱い思いが、教師、保護者、地域の皆さんに共有され、力を発揮されることを期待しています。（塾頭：吉田 洋一）